■ソーシャル・キャピタルが豊かな地域で生きる

（特非）参加型システム研究所　研究フォーラム
「市民の参加による共生社会を「非営利・協同」のネットワークでつくる」報告

2017 年 11 月 27 日

公益財団法人かながわ生き活き市民基金　副理事長　荻原　妙子

荻原　きょうのフォーラムの開催趣旨に沿いまして、生き活き市民基金の活動から見えた、ソーシャル・キャピタルがなぜ必要か、その事例をお話してみたいと思っています。

●生き活き市民基金の紹介

生き活き市民基金の紹介ですが、2003 年から生活クラブの組合員は、月 100 円の福祉たすけあい基金に取り組んできました。今、1 万 1,000 人が参加をされていまして、先ほどの坪郷先生の話を聞くと、そういう寄付こそ、ソーシャル・キャピタルなんだと思いました。こんな時代なので、社会の課題は、多様化していて、制度や市場サービスだけでは、ニーズをカバーすることはできません。私たち市民が、たすけあいとして取り組む領域は、すごく広がっています。市民のたすけあい活動や市民が応援する力を、さらに強くしようということで、2013 年に公益財団法人を取得いたしました。

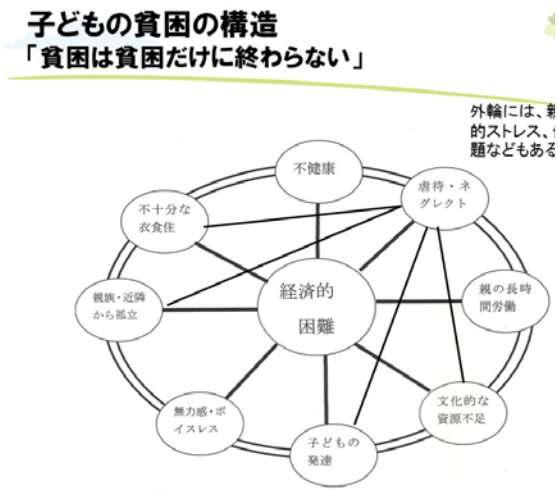
私たちは中間支援機能を目指しています。地域にはたくさんのソーシャル・キャピタル、市民活動がありますが、日々の活動に忙しくて、資金循環や、横のつながりづくり、地域への広報、政策提案は、なかなか難しい状況です。私たちは、助成をするだけでなく、地域の団体と団体、団体と市民、市民と市民をつなぐフォーラムや、研究会を通じて、市民活動の中間支援機能を、果たしていけたらいいと思っています。

設立以来、4 年半が経つのですが、これまで 102 の団体に助成をしてきました。こうした中で、徐々に子どもや若者を支援する団体からの助成申請が多くなってきています。フードバンクや子ども食堂などの、子どもの困難な生活を支援する活動団体も増えてきました。

●子どもの貧困

政府による６人に１人の子どもが相対的貧困にあるとの発表は衝撃的でしたが、私たちも、その社会的課題に気付いて、子ども、若者の貧困に立ち向かう市民活動を支援するフォーラムを 2016 年に開催しました。この図は、基調講演をされた山野良一さんの資料です。経済的貧困に陥ると、周りにある病気とか孤立とか、ネグレクトとか、親の長時間労働とか、さまざまな困難が全部つながってくる、という図です。ところが、そのフォーラムのときに最初に発言された方が、こうおっしゃいました。「でもね、私の周りに、そんな子ども見たことありません。」でも、本当にそうでしょうかと思います。国民生活基礎調査では、2015 年に貧困状態にある世帯は 15.6 パーセントといっています。この年の貧困ラインは年収 122 万円でした。このお金があれば、人が生活できますよというお金ですね。本当

にそうなんでしょうか。特にシングルマザー世帯は、50 パーセント以上が、貧困状態にあるといいます。女性は貧困に陥りやすく、本当にひとごとではないなあと思いました。



●子どもの貧困と支援の活動事例

ここから、逗子市・相模原市・港北区の 3 つの地域フォーラムで報告された事例を紹介していきたいと思います。貧困問題に対し、私たちは何ができるのかということです。まず、子ども食堂、地域食堂です。「ずし子ども 0 円食堂」です。朝ご飯とか夕ご飯、食べられない日があるんだよという子どもの声を聞いて、民生委員が始めました。公共の場を使っていますが、今地域から、さまざまな食支援とか、お金の支援もきていると聞いています。二つめの写真は、「あいおいみんなの食堂」です。生活クラブ相模原センターの組合員活動スペースを使って、組合員が始めました。生活クラブの生産者のお豆腐や、野菜の提供もあり、地域資源が使われています。右の食堂は、「ほんそん子ども食堂」です。茅ヶ崎で高齢者、子育てママの居場所をやっている、「さいとうさんち」のメンバーが、教会を借りてやっています。「さいとうさんち」という活動が基盤となって、次は子どものことだねと、そういう循環こそが大事だと思いました。子ども食堂というと、あそこは貧困者向けだから行く人はいないんじゃないの？行けないんじゃないの？という声もありますが、子どもには、信頼できる大人がいる居場所があることが、大事だと思っています。こうしたところからの基金の申請が、もっときてほしいと思っています。

次は学習支援です。教育を受けられないと、次の職を得ることが難しくなるなど、人生に

大きな不利益が及びます。困窮者自立支援制度には、任意事業に学習支援がありますが、生保の方とかに限定されています。そこに至らないグレーゾーンの子どもたちへの学習支援は、さらに重要だと思っています。ここでは、学生さんやシニアの方のボランティアでやられています。学習の重要性については、若者の未来づくりを応援するフォーラムの基調講演で鈴木和樹さんが示された図ですが、親の収入が少ないと教育不足になるし、進学試験で不利になる。その結果、安定した仕事に就けない。すると、子ども世代にも貧困が連鎖するわけです。貧富の連鎖、これ貧困の連鎖じゃないの？と最初は思ったんですが、貧しさは連鎖する、同時に豊かさも連鎖し、社会の格差は、ますます広がっていくということです。

座間で大きな事件がありました。日本は若者の自殺が飛び抜けて多いとデータに出ています。義務教育を過ぎると、子どもたちを支援する社会的資源が本当に少ないんです。今、近隣とのつながりが希薄ですので、自分はこうなりたいという大人モデルがなく、触れ合う経験も少なく、コミュニケーションも少ない。居場所がないので、コンビニとかゲームセンターにいると、警官に声をかけられるので、SNS に飛び付くというようなことがあり、居場所のないことが問題です。先日も財団に、そういう若者に居場所をつくりたいという申請の相談がありました。

●若者を支援する活動

次が、若者を支援するソーシャル・キャピタルです。シェアハウスと共同の働き場、若者と地域をつなぐコーディネーターの３例を、紹介したいと思います。路上生活者自立支援を行っている神奈川県生活サポートに、ネットカフェで生活をしている若者が訪ねてきたそうです。孤独にせずに、暮らせる場所があれば自立できると、若者のためのシェアハウスが開設されました。

次は、生きづらさを抱える若者と、シニアのサポーターが協働する、引き払い事業の「はっぴい＆キャリー」です。お互いの違いを理解して、協同で働くことができる、ワーカーズ・コレクティブの働き方の良さを生かしていて、これからのワーカーズの新しいあり方かなと思って見ています。

三つ目は、フェアスタートサポートの活動です。定時制高校を出る若者は、その先が決まってないとか、離職する人が多いんですね。そこをつなぐ費用を市民基金の「エラベル」という事業指定助成プログラムで集めました。地域の若者と就労の場をつないでいます。こうした活動は、お金(事業)にならないし、みんなで応援していかないといけません。ひとりの人が、全部を負うわけにはいきません。皆さんの参加と手助けが、必要だということです。

●フードバンクの活動

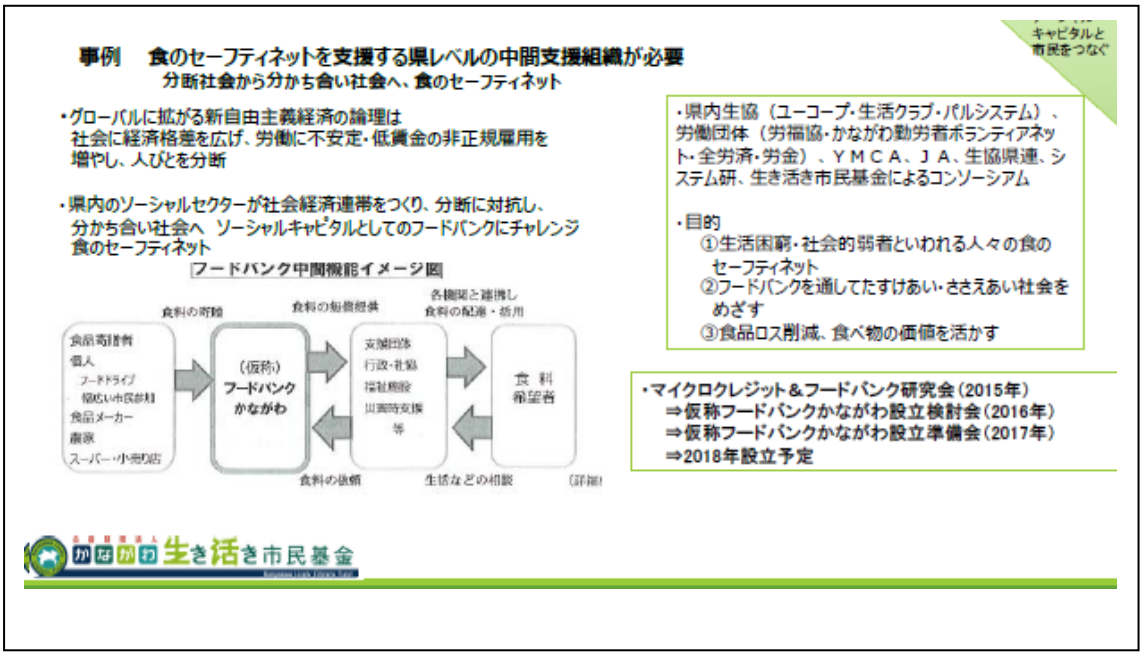
フードバンクについてですが、生き活き市民基金が設置した「社会的連帯経済を促進する研究会」では、神奈川の非営利・協同の枠組みで、フードバンクを検討しました。その結果、初めて県内のユーコープ、生活クラブ、パルシステム、生協と労働団体、JA、市民団体という、大きな枠組みの連携が成立して、2018 年 4 月を目指し、フードバンク設立の準備が進められています。これは、県レベルをカバーする中間支援組織としてのフードバンクですので、小さい地域のフードバンクにも、食品を提供していけると思っています。

まだ食べられるのに、家庭や企業から廃棄される食品は年約 600 万トン。一方で、食の確保が不自由な方もいらっしゃる。そこをつなぎ、循環させる仕組みです。でも、フードバンクには、食品ロスだけじゃなく、地域の分かち合い、支え合いの場づくりと地域循環をつくっていきたいという、大きな目的があります。

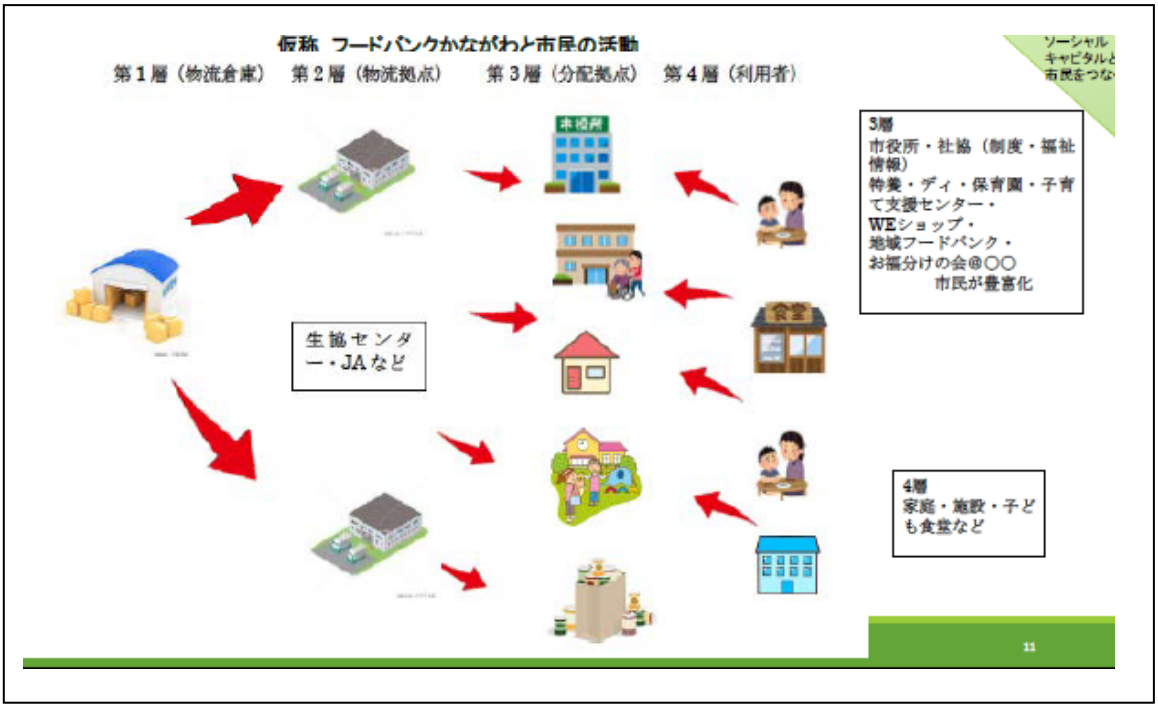
貧困・困窮は見えにくいんですが存在します。食料支援は、見えにくいところをつなぐ道具です。緊急支援としては、食べられない状況から脱却しなければいけないし、福祉制度や就労、住まいの確保につなぐことが重要です。それだけではなく、貧困からの脱却を進めるためには地域の NPO とかさまざまな手助けや配慮につないでいく。それから地域資源の子ども食堂等につなぐ、つながりづくりが、一緒に行われなければならないということで、市民の出番は大きいと思います。

●フードバンクの流れ

流れを説明します。物流倉庫を拠点に全ての物が集まってきます。そこから生協のセンターとかの第 2 の物流拠点にいきます。そこから第 3 の分配拠点、市役所ですとか、福祉



施設、保育園とか地域のフードバンクに物が届けられて、そこで分配をします。4 層が利用するかたがたですね。それで、私たちはどこをやるのかというと、一つは地域の分配拠点になることがあります。行政が捉えている生活保護受給世帯の周辺のグレーゾーンには、さまざまな方がいらっしゃいますが、それが一番分かるのは地域の保育園とか、社協さんとか、フードバンクのかたがたです。もう一つは周辺でのフードドライブの活動です。フードドライブは、ご自宅にある、消費期限があと 2 カ月ぐらい残っているような食品を、生協の店舗やデポー、センター、市役所とか、イベント会場に、みんなが 1 個 1 個持ち寄って、それを分配する活動です。常温品とお米を、その対象にしたいと思っています。フー



ドドライブをする、それから分配拠点となって配送のお手伝いをする。分配のお手伝いは、私たち誰でもできると思いますので、ぜひ、参加をお願いいたします。

●「お福分けの会」の実践紹介

その分配拠点での実践例です。「お福分けの会」、主催は「まんまさくらんぼ」です。まんま代表の金子さんに、お話を聞いてきました。写真のように、箱に分配しているわけですが、瀬谷区の NPO 法人まんまでは、親子のつどいの広場を利用される親御さんの中に、生活の苦しい人が多くて、食料支援を始められたそうです。そしたら、非常に有効であることが分かり、現在、子育て支援拠点の４カ所で、85 世帯分の食料を、月３回、分けています。シングルマザーの方が、多いとおっしゃっていました。東京の大手のフードバンクや、町のパン屋さん、おてらおやつクラブという所から、提供を受けています。これから、生活クラブのパン製造のオルタフーズもその輪に加わることになっています。この活動のいいところは、分ける作業に利用者の方も加わっていることです。私分ける人、あなた食べる人ではなくて。お互いの違いを分かり合って、分かち合う。あげるとか、もらうだけの関係ではない、新しい関係づくりを目指しているところが、いいなと思っています。宅配もしますので、宅配ボランティア、フードバンクやオルタフーズに取りに行く、配送ボランティアも募集しています。

●政策提言活動

政策提言は、中間支援組織の重要な役割であると言われていますが、政策提言には、ヒト、モノ、カネがかかるんですよね。私たち、自分たちでは、なかなか難しいのですが、政策提案を行う市民活動の支援をしています。この 12 月から、川崎地域エネルギー市民協議会が、川崎再生エネルギー推進条例制定活動をやります。その活動費を一緒に集めましょうと言っています。助成活動を通じて、地域活動の相談もつないでいますので、地域で活動を進められているみなさんが、何か考えられていることがあったら、一緒に考えていきたいと思います。（了）